

## 第六十三回

# 静岡県保育研究大会

令和六年一月二十五日  
静岡市 グランシップ

## 速報

### 「第六四回

関東ブロック保育研究大会

新潟大会」  
開催される

一月二十五日グランシップに於いて、二〇二三年度静岡県保育研究大会が開催されました。一般参加者三四九名を、一四名の大会運営関係者により迎え、いよいよ開幕。

中ホールでの開会式では、ピアノの伴奏にあわせて県保育士会中原直子副会長により児童憲章が朗読され、土山雅之運営委員長により挨拶に続き、開催地静岡市の橋本隆夫こども未来局長様、県健康福祉部高橋真一朗こども未来局長様、県社会福祉協議会高橋邦典常務理事様からそれぞれにご祝辞を頂戴し、各会場に分かれ分科会の時間が始まりました。

八つに分かれた各分科会それぞれで東部・

中部・西部

各地の実践発表がなされ、日頃こどもを真ん中にしながら学びつつ、保育者自身も集団の中で共に育ち合っていることが伝わる熱い内容となっています。



た。またそこに伴走者として寄り添う助言者の適切なアドバイスにより、この場をより質の高いものに昇華して頂きました。一般参加者からの質疑も活発に行われ、午前中になされた発表だけでは気づけなかった部分には、丁寧な回答が引き出され深い学びに繋げることが出来ました。どの発表も甲乙つけ難い中、新潟市で開催される関東ブロック保育研究大会へ派遣される議長・発表者が選抜されました。

閉会式では今大会の研究成果を広く内外に伝えるために「大会宣言」が採択されました。この一日を通して、年始一日に起こりました能登半島地震復興への支援を目的とした義援金が広く呼びかけられ、たくさんのご協力をいただきました。

今大会の盛行に関わっていただいた皆さま、各園の現場を守っていただいた皆さまに心から感謝申し上げます。これからも子どもを真ん中に語り合っていくきましょう。



令和六年七月四・五日に新潟市において、関東ブロック十五都県市より一〇七五名が参加し、標記の大会が開催されました。

静岡県からは、「第六十三回静岡県保育研究大会」に於いて選出された、第七分科会議長 中郷南保育園 瀬川尊也園長、発表者には、第一分科会の西貝保育園 多田智子先生、第六分科会の勝間田保育園 朝比奈いずみ園長が代表者として登壇されました。

結果、関東ブロック各都県市から選出された素晴らしい研究発表の中から、第六分科会の発表者である、勝間田保育園 朝比奈いずみ園長が令和六年十月十七・十八日に開催される「第六七回全国保育研究大会 奈良大会」に選出されました。



(※県大会表彰時の写真)

## 第一分科会

テーマ 【新たな時代の保育実践

～すべての子どもにむけて～】

発表者 ①富士宮市立西保育園

保育士 伏見 千歌

②静岡市 清水りんぼかんこども園

保育教諭 東海 百華

③磐田市 西貝保育園

保育士 多田 智子

議長 三島市立伊豆佐野保育園

園長 長澤はるみ

助言者 静岡県立大学短期大学部

部長 永倉みゆき

記録者 三島市立錦田保育園

園長 川口 佳子

発表① 子どもと保育者の心を育てる保育

「かもしれない保育」は共主体のはじまり

富士宮市立保育園では、今後より良く生きる力を育むために子どもと保育者の心を育てる保育が必要と考え、保育の大切な姿勢（思考）を「かもしれない保育」と名付け、実践し、エピソード記述やWEB図を用い、検証してきた。子どもの思いに寄り添い、何事も断定せず「かもしれない」と肯定的で想像が膨らむような声掛けをすることで、主体的な遊びが広がり、心を揺さぶられるような体

験を繰り返すことが、子どもと保育者の共主体のはじまりであるとわかった。楽しみながら子どもと保育者の心を育てる保育を実践し続けていきたい。

発表② 「子どもの思いに寄り添って」

子どもの視線の先を見つめて

静岡市清水区の私立保育園・こども園では、「子どもの思いに寄り添って」をテーマのもと、子どもの心の育ちについて研究に取り組んだ。子どもの気づきや発見したことに寄り添い共感し、子どもの視線にもう一度注目し、「子どもの視線の先を見つめて」をテーマに実践し、記録を取り、その実践記録を持ち寄り話し合いをし、考えを深めてきた。私たち保育者はこどもの気づきを大切にとらえること、子どもが自ら体験する力や諦めない力がさらなる育ちへとつながるように意識しながら子どもと向き合っていきたい。

発表③ 『人とふれあえる遊び・わらべうた』

いわた保育士会研究会では、新型コロナウイルスの流行により人と触れ合う機会が減っているのではないかと考え、遊びを通して人と触れ合う楽しさや心地よさを感じてもらいたいという思いから「人とふれあえる遊び」として「わらべうた」を保育に取り入れた。参考文献を用い知識を深め、各園で実践をし、検討をくりかえしてきた。わらべうたを始めると一緒にふれあいを楽しみ、「次は自分の番」と期待したり、仕草や言葉で「もっとや

って」と求めるようになった。さらにわらべうたの知識を広げ、保育に活かせるようにしていきたい。

助言者より

「新型コロナウイルスの拡大やICTの活用の弊害があるかもしれない」という前提に、コミュニケーション能力の低下を想定していた。リモートが明け、対面になったことで、対面しかできないよさがわかったということである。これからの「新たな時代」は、心を育てることがより大切であり、外国籍の子や様々なタイプの子などの多様性を認め、異年齢児の良さ、少人数性の良さなどいろいろな保育を広げて行ってほしい。また『STEMA教育』を推進し、乳幼児期から自然の中に科学性を見出してほしい。





## 第二分科会

テーマ【配慮を必要とする  
子どもや家庭への支援】

発表者

①富士市 すみれ認定こども園

園長 後藤 恭佑

②焼津市 焼津市保育園協会障児

保育部会なかよし保育園

保育士 田宮 洋美

③浜松市 はらっぱ保育園

保育士 米山 明奈

議長 富士市 中里保育園

園長 青野 貴芳

助言者 静岡大学教育学部

教授 香野 毅

記録者 静岡市 清水みらい保育園

園長 伊澤こずえ

発表① 睡眠時に気になる子の特徴、睡眠か  
らみる気になる子へのアプローチ

八年前から全園児に睡眠アンケートを実施し生活習慣の把握をしている。家庭での睡眠時間と午睡時間の見直しをした四歳児クラスの実践を通して気づきがあった。気になる児童は様々な要因や先天的な物がある中で、各家庭環境の中で生活習慣を安定化し、睡眠や食事の確保を是正するだけで、改善がみられる事が分かった。配慮を必要とする子どもや家庭への支援を家庭で出来る事、園で出来る

事とを分けて考え取り組んだ実践から、クラス全体を通して取り組んだ事が結果的に配慮を必要な子にとっての支援になると感じた。

発表② 子どもの育ちを支えるために  
～保育者が対応に戸惑う時～

焼津市保育園協会では十三ヶ園の保育士が集まりテーマを決めグループワークを通して学んでいる。

実践をもとにした話し合いを通して、三つのポイントに焦点を絞ることができた。①園全体で子どもを育てていくこと②日々の子ども楽しいと思える時間を増やす③なぜそのような行動をとったのか取らざるを得ないのか。保育者の子どもの思い、関わり方が子ども一人一人の言動に影響を与え、子どもが魅せる育ちの姿にも変化が生まれ、確かな発達に繋がることを感じた。改めて育ちの伴走者としての専門性の意義を実感することができた。

発表③ 安心して通える居場所づくりから  
途中入所してきた二歳児の支援と家庭への  
支援の実践から学んだ事をまとめた。

最初に本児を知る所から始め「すき」を沢山見つけながら気持ちに寄り添い、安心して生活する事を大事にしてきた。中でも思い通りにならないと怒って暴れる姿やパニックになって泣く事もあった。

その時「どうしよう」と心を立て直すきっかけを一緒に探ったり、時に自分で見つける

等大人の援助を支えにまた次へと向かう経験を積み重ねてきた。保護者の不安な気持ちを受け入れ、出来ないことは無理強いせずに受け止めて園でフォローをすることで保護者にとって園が安心できる居場所へと変わった。

助言者より

二十年前は「直さなくてはいけない」だったが、今は「その子の持っている物を生かしながら、その子にお互いが合わせていく」支援が常識になっていく。その子の育ちを守っていく為には、一人一人の事例検討と擦り合わせし個々の目標を共有して支援につなげる。支援目標の方法や適切性の判断は、丁寧に支援した手応え。キーワードは「答えは子どもが持っている」そして「保護者支援とは「保護者の生涯発達に寄り添いながらお手伝いをする仕事」保護者を完成した大人と見ずお互い未完成な大人同士として支援をしていく。



## 第三分科会

テーマ 【保育者の資質向上を図り、

保育現場の魅力を発信する】

発表者 ①伊豆の国市 ちとせ保育園

園長 小林弘之介

②静岡市 新富町こども園

園長 柴田 尋子

③袋井市 明和第二保育園

園長 加藤 千晶

議長 浜松市 平和こども園

園長 矢野 尚美

助言者 常葉大学保育学部

教授 山本 睦

記録者 浜松市 平和こども園

副園長 鈴木 真澄

発表① 研修参加によるポイント制度・職場

環境の改善

外部研修等への自主的な参加を促すため、研修参加によるポイント制を制定し、翌年度の昇給に結び付くようにした（七名が昇給）。研修内容を報告・実践することにより、職場全体のスキルアップを図った。また、働きやすい環境づくりのため『有給休暇の計画的取得（現在取得率八五％）』『保育補助者（保育士資格等の無資格者）の雇用』『書類等の作成時間の確保』を行った。その結果、職員の離職率の低下（過去五年間0％）に繋がった。

発表② 繋げよう！広げよう！

保育のすばらしさを次世代へ！

人手不足が切実な問題となっているが、不適切保育の報道などにより、保育の仕事我希望する学生が減っている。次世代への架け橋になればと中学生や高校生の職場体験を積極的に受け入れている。自分が体験したことを校内新聞に見せてくれた学生、朝は緊張した様子だったが、帰りには笑顔で帰っていた男子学生など、受け入れてよかったと感じることが多々あった。これが未来に繋がることを願い、これからも保育者が生き生きと働ける環境づくりに努めていきたい。

発表③ 子どもの姿を振り返り、

語り合う風土

日常の些細なことを言葉にしたり、職員会議で情報共有したりすることにより、コミュニケーションが図られ、物事をポジティブにとらえることができるようになった。また、園長との個人面談を年二〜三回行い、意思疎通に心がけた。保護者との情報共有ツールとして、連絡帳や送迎時の会話、動画配信を利用した。相互理解を深めることにより信頼関係が構築され、職員のモチベーションアップにもつながった。園で取り組むべきことを丁寧に言い、職員の連携をより強くすることが、資質向上に繋がると感じている。

助言者より

英国では保育士の資格制度が変わり、パー

トタイムであっても正規職員と同じ待遇が受けられるため、自分の子育てをしながら働くことが可能になった。そのため、自分の専門性を向上させようという意識が高まり、保育者全体の資質向上や就業継続につながった。また、子どもたちには自分の好きなものごとを追求できる環境を設定し、新しい学習指導要領のアクティブラーニングの基礎となっている。皆さんもカリキュラムマネジメントに取り組み、子どもを見る視点を各園で話し合ってもらいたい。それが園の強みとなり魅力となるので、外部に発信してほしい。





## 第四分科会

テーマ 【地域の子育て家庭への

支援の充実にむけて】

発表者 ①御殿場市 みらい保育園

保育士 中川かおり

②静岡市 いさみ保育園

主任 酒井 祥代

③湖西市 真愛保育園

園長 杉江 玲子

議長 小山町 菜の花こども園

園長 田代志のぶ

助言者 静岡福祉大学子ども学部

教授 永田恵美子

記録者 小山町 町立きたごっこども園

園長 斎藤 美栄

発表① 地域の子育て家庭への支援の充実に

むけて コロナ禍を経て親子が安心

して過ごせる子育てサポート

コロナ禍を経て在園児や一時保育利用保護者にアンケートを実施した結果「感染への不安」「孤独への不安」「生活への不安」があることが分かった。子育て中の親子がコロナ禍の中で安心して過ごせる環境とは何か、保育者ができるサポートについて三つのことにポイント絞って取り組んだ。①子育てサポート環境やおもちゃ提供の仕方、活動内容の見直し②保護者に向けての発信（つぶやきコー

ナーの設置や成長カレンダー等)③子育て家庭との関わり方や支援の在り方を試みた。結果、保護者が不安や迷いを表出しやすくなり、保護者同士のコミュニケーションを深められ、思いに寄り添うことで園生活への興味も深まった。

発表② 地域の子育て家庭への支援の充実に

むけて SNSを利用した地域のつ

ながりと子育て支援のあり方

地域の子育て家庭はどのような支援をもとめているのか、園でできる支援のあり方を考え研究を進めた。「おしゃべりサロン」の内容を見直し、その都度アンケートをして子育て家庭の知りたい事や、やりたい事を理解し、要望等を次回に反映させていくことや、「わらべうた」「離乳食レシピ」の情報発信する等子育て家庭が求めていることを活動に取り入れ、改善することができた。

また、SNSを活用することで、保護者が園生活に関心を示し、親子の会話や関わりがきっかけになるような取り組みができた。

発表③ 地域の子育て家庭への支援の充実に

むけて しんあいつこクラブってど

んなところ？

園で行っている子育て支援のあり方を考え直すところからスタートし、真愛保育園を知ってもらおうという意味も込めて、地域に向けての子育て支援事業を開始した。まず、チラシを地域回覧板や小児科、子育て支援センタ

ーに設置したり、積極的に声をかけていくことで次第に利用する親子が増えた。クラブの「のんびり」「ゆったり」の雰囲気も大切にしつつ、保育園ならではの環境や物、人材、アイデアを活かし、保護者と保護者を繋げる役割や、必要とされる支援のあり方を今後も進めていきたい。

助言者より

園の立地状況・家庭環境・地域特性、コロナ禍の影響として人間関係の希薄さを感じられる今日、今回の研修で子育て支援の取り組みについて三つのことが見えてきた。①保護者の思いの表出や保護者同士をつなげる②SNSなど視覚的情報の使い方を考えながら活用③地域資源をいかに使うか？今後も私たちは地域をつなぐ「つなぎ役」として子育て力をあげ、保護者に丁寧に対応を心がけて支えていきたい。



## 第五分科会

テーマ【子どものより良い育ちと安全・安心の環境づくりにむけた関係機関とのネットワーク】

発表者 ①伊東市 つくし保育園

園長 澤井伊佐子

②静岡市立瀬名こども園

園長 増田 寿子

③浜松市 マーガレット保育園

保育士 大橋 美弥

議長 吉田町立わかば保育園

園長 増田 靖子

助言者 常葉大学健康プロデュース学部

准教授 中村 俊哉

記録者 吉田町立さゆり保育園

園長補佐 長尾 慶子

**発表① 個々を大切にしながら安心して就学できるための様々な機関とのつながり**

就学に向けて他機関とのつながりを深め、安心して就学できるよう研修を行う。まず、子どもの育ちや、保護者の不安を解消するために、園内で話し合いを行い、必要であれば巡回相談など、様々な関係機関と情報交換し、アドバイスを受け、保育の幅を広げている。また、市内の十三施設の園長で、園長会を行い情報共有したり、歳見別での職員交流

や保幼小や、小学校別の五歳児の交流等を行い、法人全体で問題検討するなど協力体制のもと、個の育ちを大切に、よりよい就学につながるよう取り組んでいる。

**発表② 小中学校・園医との連携**

コロナ禍でコミュニケーションや体験の場が減り、子どもの生活や遊びではICT化が日常のものとなってきている。園での教育保育の中にどのようにICTを取り入れていくか模索が始まっている。小中学校では、タブレットが導入される中「メディアコントロールデー」を家庭と連携して進めている。保育園でもメディアとの関わりを正しくコントロールする気持ちを育てることの重要性を感じ、アンケート調査を行いながらメディアとの関わり方の意識を高めている。

**発表③ 安定・安心・安全の環境作りのための地域連携**

海の近くで津波の危険性がある立地のため、近隣企業や地域ボランティア、小学校と連携して、合同避難訓練を行っている。安心安全の環境作りのために、各機関の連携が必要であり、いざという時の助けとなり、避難先を増やすために、地域の住民フェスティバルを実施し、園を知ってもらう活動を行い、交流を深めている。子ども達も、地域との様々な共通体験で、大人に見守られていることを体感している。今後も安心して過ごせる環境を作っていくたい。

### 助言者より

同じ研究をしていても、考えや価値観が違い、多面的視点から話が聞けて良かった。様々な関係機関との関わりで一緒に協力して取り組んでいくことは、信頼関係ができ、とても大事である。子ども達が安全安心に就学するために、保幼小の連携が大切である。十の姿を引き継ぎ、またICT化により、メディアと正しくかわる力、自己コントロール力を保育園からつけていくことなど、保幼小とのつながりをもって同じことをやっていくポトムアップが必要である。そのためにも、資質能力の向上がとても大事である。小学校とのつながりが、これからも発展していくと思われる。





## 第六分科会

テーマ【家庭や地域との連携による  
食育の推進】

発表者 ①沼津市立戸田こども園

保育教諭 鳥谷部まりえ

②牧之原市 勝間田保育園

保育士 古川 佳奈

③掛川市立すこやかこども園

保育教諭 野村 純子

議長 菊川市 菊川保育園

園長 松村 成子

助言者 NPO法人 子どもの森

理事長 吉田 隆子

記録者 菊川市 菊川保育園

主任 沢田 政子

発表① 戸田の良さを生かした保育・  
地域で育つ 家庭で育つ へだっこ

保育目標に「たくさんの体験をして自ら気づく子」を掲げ、戸田の地域産業や特産物を活かした食育カリキュラムをもとに食育活動を実践して行った。家庭や地域と関わりながらの食育活動から、子ども達に、探究心・感謝の気持ち・周りの環境に目を向け自然を大切にしようとする気持ちが生まれ、達成感や自信が育まれている。また、地域の方々との交流は、双方に存在の大切さを気付かせる機会となり、自分の育つ地域への関心にも繋が

っている。

発表② ドキドキ、ワクワク  
みんなで楽しむ食育活動を通して

保護者のほとんどが農業に携わっており、栽培や収穫が生活に密着した環境で育つ子ども達にとっては、園で行う食育活動に物珍しさはなく、興味関心の薄さが課題となっていた。そこで、保育士・保護者・地域の方が協力して、子ども達が、ドキドキ・ワクワクする活動をしようとして、今まで育てたことのない野菜の栽培に挑戦した。名前も初めて聞く野菜の、種まきから収穫、味わうまでを経験し、子どもと保育者、保護者が、地域の方々と巻き込んで楽しみ、驚きや発見を共有することができた。

発表③ 畑をなんとかしようから始  
まった子ども主体の菜園活  
動

「大きな畑が欲しい」という子ども達の思いから、地域の方との出会いを大切にした取り組みが始まった。「どうする?」「どうしたい?」と投げ掛け、共に考えて、じゃがいもの植え付けから収穫、カレーパーティーの企画開催へと一連の流れに沿って丁寧に進めてきたことが、子どもの主体性や、力を合わせて一つの事を成し遂げていく楽しさに繋がった。家庭や給食の先生との応答的

な関わり、地域と連携した活動は、食だけに止まらず、人への感謝や心が通い合う喜びをもたらしした。

助言者より

各園それぞれに、地域の物的・人的資源を活かし、身近な環境の中で実体験を通して「食べたい気持ち」を育んでもらいたい。保育者として、子どもたちが経験の中で五感を働かせて感じ、返って来る反応、つぶやきや疑問に耳を傾け、そこに寄り添った食育活動を展開して行くよう心掛けて行きたい。

また、昨今の咀嚼、嚥下機能の低下がもたらす心身へのデメリットは大きい。その前提となる食べる姿勢の確立にも力を注ぎたい。同時に、日本の文化であるお箸と器の持ち方も、幼児期から大切な事として伝えて行きたい。



## 第七分科会

テーマ【保育の社会化にむけての保育の営み  
をいかに社会に発信するか】

発表者 ①富士宮市 外神あけぼの保育園

副園長 石川小百合

②静岡市 市立小島こども園

園長 丸山 智子

③御前崎市 高松保育園

副園長 沖 恵子

議長 三島市 中郷南保育園

園長 瀬川 尊也

助言者 常葉大学短期大学部

教授 鈴木久美子

記録者 富士市 富士保育園

園長 後藤 匡

### 発表① 地域に根差した保育園をめざして

地域高齢化やコロナ禍で、地域の方との繋がりが減り、保育園の取り組みを発信する機会も減った。近隣の方々の日頃からの声掛けや交流が園児の社会性を育み、地域に根差した園になっていくと考え、情報発信について話し合い取り組みを行った。地域へのお便りの回覧と掲示では、関りが薄くなっていた地域の中で園の存在をまた意識してもらえようになった。職員・保護者へのアンケートではアナログで伝える良さと共に時代に合った発信方法の必要も感じた。日々の園の様子

や園児の活動を伝えていく事に囚われずに保育園の職員が日頃、何を行っているか保育の営みを周囲に知ってもらい安心感を持ってもらう事に繋がればと思う。

### 発表② 地域と共に

静岡市公立こども園清水十二支部では、自然豊かな地域の中で地域の特徴を生かす保育を積極的に行っていたが、コロナ禍により地域との関係性が希薄になり、今までの取り組みを精選する機会となった。地域の人と応答性のある繋がりの中で地域の様々な伝統や文化、環境資源を知り、興味関心を持つ活動を進め、地域の方との交流活動をブランドデザインに位置づけし、幼児教育保育について理解してもらい進んで協力してもらおうきっかけを作り、ふれあいを積み重ねながら、地域に根差した園になるよう取り組んでいきたい。

### 発表③ 繋がりがこそ大切に

御前崎市の西部の園外散歩にも恵まれた場所に位置し、人を育てることは人にか出来ないと感じ、「繋がりを」をサブテーマに取り組んだ。地域の方と繋がる機会を増やし、繋がることの大切さに気付ける活動の展開として園児と共に行う活動と職員の資質向上に視点を置き、地域の方とのふれあい計画を行い。多くの方に支えられ運営されている事を再確認し、繋がりを大切にしていくには、保育者が子ども達にどう伝えるか、背景や想いに気づかせていく事が大切だと感じた。また掲示

板等で保育が伝わるような掲載内容の充実も身近な人達にこそエピソードを伝えたいが社会への発信はまだ検討が必要と感じる。

### 助言者より

第七分科会では平成二十五年からこのテーマを扱い、いい意味で原点に戻ったと感じる。大きく社会化に向けて色々なアプローチを報告してきたが、今回、発表園が図らずも地域や繋がりを運び、実践を行ってきたことは時代や環境変化の節目になると感じる。保育の内容・意図をどういう風に伝えるか、単なる活動報告で終わるのではなく、そこをスタートとして子どもの育ちをいかに支えて、年齢に応じた発達や保育内容・意図をどう保護者に伝えるかということ、また手間かもしれないが地域へのものと発信する内容は違うべきで使い方も考えていく必要がある。





## 第八分科会

テーマ【公立保育所・公立認定こども園等の  
使命と地域社会での役割】

発表者 ①清水町立南保育所

所長 下川原あゆみ

②藤枝市立岡部みわ保育園

園長 白鷺 朱美

③浜松市立可美保育園

園長 池内 結子

議長 静岡市立原こども園

園長 岸端 宏美

助言者 静岡英和学院大学 人間社会学部

静岡福祉大学 こども学部

非常勤講師 徳浪 芳江

記録者

静岡市立田町こども園  
園長 興津 友紀

**発表① 地域を愛し、地域に愛され、地域に  
返り、地域に根づく湧水の子をめざ  
して**

ひとりひとりの特性にあったきめ細やかな  
保育を行うため、園内外での研修や長泉町と  
の人事交流を開始し、スクールカウンセラー  
等関係機関との連携を図り、保育を振り返り  
保育に活かすことをしている。また、地域の  
高校生と遊んだり、近所の方と野菜の栽培や  
収穫をしたり、町のキャラクター「ゆうすい  
くん」も保育に取り入れ、やりとりを楽しみ

経験を積み地域への関心や愛着心が育まれて  
いる。さらに、ガキ大将育成プロジェクトと  
称し異年齢活動の中で多くの子どもや保育者  
と関わることで様々な遊びの展開・充実が感  
じられる。保育の基本を振り返った取り組み  
が保育力向上につながっている

**発表② 保育の専門性向上に向けた人材育成  
と地域連携について**

楽しみながら動く事を通して、からだ・こ  
ころ・あたまの調和のとれた発達を促すムー  
ブメント教育療法を保育に取り入れている。  
この活動の公開や研修を行い、こどもの姿を  
多面的に捉え「読み取る力」の向上に繋がっ  
ている。また、「現状把握表」を使いこども  
の現状を整理する。それを職員が共有し個別  
支援計画を作成する中で、視点の変化と共に  
支援が広がり、クラスの枠を超えたチーム支  
援を実感できる場面が増えている。地域の保  
育・教育施設と情報共有し、互いの園の保育  
を伝え研修を行い、気軽に相談できる関係性  
を築き学びあっている。

**発表③ 要保護・要支援児等の受入れと支援**

各園長に公立の使命についてアンケートを  
行うと「専門機関や行政との繋がりが」「公共  
性・公平性の保育」「要支援児の積極的な受  
け入れ」が多かった。発達支援において園の  
中心となる基幹的職員は研修を受け、園内の  
保育・対応を担っているが、更に向上する為、  
関心を持つ職員と研修時間を増やす等、今後

の取り組み方が重要となる。また療育専門の  
職員の園訪問や児童相談所との人事異動から  
スキルアップを図りパイプ役を担う事もして  
いる。強みを活かし繋がりを強化していく。

**助言者より**

保護者は子どもにも地域を愛して欲しいと  
願いを持っている。生きていく上で心の故郷  
となる安心できる温かさを、小さい時に感じ  
る活動が行われている。職員から地域に向け  
積極的コミュニケーションを  
ケーションを図っ  
ていくと、園・こ  
ども理解につなが  
り、良い関係が築  
かれ関りの機会を  
増やす事が出来て  
いく。

こどもが面白が  
ってやる・職員が  
保育を見て欲しい  
と言えるのはバイ  
オサイコソーシャ  
ルが育くまれてい  
るという事。皆で  
認め合い育ちあえ  
るのが良い。公立  
の価値を見出しプ  
ライドと自信を持  
ち務めていけると  
良い。



# 県保育研究大会に参加して

## 第一分科会

「新たな時代の保育実践」すべての子どもに向けて」のテーマで、新たな時代の保育とはどんな保育なのだろうかと興味をもって三園の実践報告を聞きました。様々なメディアやAIが溢れ、コロナ禍の影響で実体験が減少し、人間関係の希薄が危惧されるなど、現在の子どもたちを取り巻く環境は変化をしています。

「かもしれない保育」と名付けて前向きに保育を進めていった実践は、失敗という感覚はなく常に「かもしれない」と職員間ですり合わせていき、前向きに保育を楽しんだ様子が見えました。

どの実践も職員間での話し合いや保育の語り合いの時間を大切にしています。WEB図が保育計画に活用されていることを知り大変参考になりました。

初生保育園 竹下 敬子

## 第二分科会

「配慮を必要とする子どもや、家庭への支援に向けて」というテーマで各園の発表を聞かせていただきました。

特に睡眠について興味深いお話を聞くことができました。コロナ禍を通じ、乳幼児期の

基本的な生活習慣を身につけることが大切だと感じていたので、とても勉強になりました。配慮を必要とする子どもの増加が指摘されまた保護者自身が生活面など何らかの問題をもち子育てに困難が生じるケースも増えていると言われます。

香野先生のお話の中で、保護者支援は保護者が育つために行うもの、生涯発達に寄り添いお手伝いする仕事という言葉が印象に残りました。

子ども達のために、自分たちが出来ることを話し合い、実践していきたいと思います。

函南さくら保育園 高村 亜矢子

## 第三分科会

「保育者の資質の向上」と「保育現場の魅力を発信する」という保育を営んでいく上で大きな両輪と、保育現場にある大きな課題について学びました。

子どもたちが日々活発に遊ぶことができるのは、保育者が生き生きと楽しく明るく働くことが大前提です。それには、働きやすい環境が何より大切です。

保育者の言葉に耳を傾け、どうしたら膨大な職員の仕事を軽減できるのだろうか、各園がしている試行錯誤を感じることが出来ました。

保育現場の魅力の発信では、これから担う次世代育成の提案に共感しました。又、発信の実態把握から「理解してもらええる発信」の具体的な実践を学べました。

職員一人ひとりの頑張りを認め合い、協働の楽しさを大切にしながら、時代にあったITCを取り入れていくことで、保育者のモチベーションが高まり、質の高い保育者集団に成長していければと思います。

静岡市立和田島こども園 後藤 美佐子

## 第四分科会

それぞれの園がコロナ禍にも負けずに、長い間の活動をまとめて発表してくださいました。

親の悩みや思いをきちんと受け止め発信している報告や、母子で子育てセンターに来ていただき、母子ともに健康で楽しく過ごせるように、それぞれの園が日々工夫し、努力をしている様子がよくわかりました。

新型コロナウイルスが五類に変わった現在、今以上に地域に向けて積極的に発信し、多くの親子が行ってみようと思えるような場所作りが大切だと思います。

何十年も前から取り組んでいる地域や、始まったばかりの地域と、出発は様々ですが、各市や町で子育て支援センターがますます発展し、地域に根差した住み良い場所に定着する事を信じています。

みらいこども園 高橋 さと江



## 第五分科会

令和五年四月に、こども家庭庁が設置され『こどもまんなか社会』の推進に向けて動き出しました。こども園においても、今まで以上に地域の子育て世帯に対する取り組みの重要性を感じています。

アフターコロナの活動として、地域の方々に園を知っていただく機会を増やし、関係機関との連携を強化していくことで、子育て世帯への応援団を増やしているところです。

今回の研究発表を聞く中で、新たな関係構築のヒントをたくさんいただきました。

今後とも行政と共に、地域に根差した子育て支援の拠点としての役割が果たせるよう、開かれたこども園運営に取り組んでいきたいと思えます。

静岡市立上土こども園 杉山 真紀

## 第六分科会

今回の研究発表を聞いて、食育のすばらしさを改めて感じる事が出来ました。

大人が決めたレールに乗るのではなく、子ども自身がどうしたいのか、主体性を尊重しながら活動をしていくこと、見守ることの大切さも学びました。

また、子ども達のことをよく見て、どうやったら子ども達が興味を持ってくれるのか、その背景を踏まえたくらんで考える事も素敵だなと思えました。

地域や家庭との連携の中で、信頼関係を築き、その中で貴重な経験をすることで、挨拶・感謝・達成感などを体験し、成長に繋がっていくと感じました。

発表を聞き、とても勉強になりました。

焼津南保育園 吉永 早耶香

## 第七分科会

「保育の社会化」をテーマに、各地域を代表する発表を聴講させていただきました。地域性それを取り巻くソフトとハードの両面・園として何を大事にしていきたいかによっても、保育の営みは様々であることが理解できました。

地域の交流では、歴史や文化の継承を通して地域との連携を図り、共に同じ時間を過ごすことはとても重要です。地域との連携体があったり。多くの方達と共に向き合い、より子どもたちの為にと大事にしていることを大変羨ましく思いました。

園としては、日々地域社会に対して「発信の仕方」はどのようにするのがベストなのか」と考えがちですが、保護者が安心してくださることが前提なのではないかという思いを感じました。今後子ども達の気持ちに寄り添い、地域と子どもたちにしてあげられる事は何か、どのように発信したらよりよく伝わるかを引き続き考えていきたいです。

中泉保育園 伊藤 夫美

## 第八分科会

分科会テーマに沿った公立保育園・所の特色ある取り組みの発表の中で、配慮が必要な子が多くなってきた今、各園で特別支援に関する内容がありました。

遊びの中で「ムーブメント」という方法を用いたり、地域の児童発達支援事業所と連携を取り、職員の研修や育成を進めていたり、とても参考になるものでした。支援計画を作成する際も、クラスのリーダーが集まり、園独自の現状把握表を用いて、必要な子全員について話し合っているなど、取り組み方や考え方を学ぶこともできました。

どの園も職員間の風通しがよく、協力的体制もできていることで、職場環境の大切さも感じました。

清水町立南保育所 小野 善子

